昭和からの伝言（4）

―太平洋戦争終結の詔書・玉音放送

土田　良吉

玉音放送とは、天皇の肉声（玉音）を放送することをいいます。今から75年前、太平洋戦争が終結した、昭和20（1945）年8月15日正午（日本標準）、当時、日本で唯一のラジオ放送局だった社団法人日本放送協会（現在のＮＨＫラジオ第一）から、昭和天皇が太平洋戦争の無条件降伏を告げる「終戦の詔書」、いわゆる「終戦の玉音」を全国に放送されました。日本国民は、はじめて天皇の肉声を聞いたのでした。詔書には、終戦とか敗戦のお言葉はなかったものの無条件降伏に至ったことが切々と伝わりました。戦火に遭い肉親や家財を失った多くの人々の感慨は如何ばかりであったろうか！そして焦土と化した国土を思う天皇の悲壮な決意が拝察されるのです。全国津々浦々に至るまで、悔しい思いにひたった「一番長かったあの日」は、瞼から離れることはないでしょう。

戦没者約3百万人余と言われ、毎年、玉音放送のあった日、8月15日を終戦記念日として、政府主催の「全国戦没者慰霊式」が行なわれています。

統計によれば、玉音放送の当日、小学生だった方々（当時10才前後）は現在700万人程になり、私（95歳）と同じ方も52万人（うち男10万人）と言います。あの日を語る数少ない証人も、何時かは消えるでしょうが、此の国の歴史的痛恨の日の事実は、永久に語り継がれるに違いありません。

前稿でも触れましたが、自分（当時20才）は、陸軍最後（あとで分かった）の徴兵で終戦4ヶ月前の昭和20年4月、出身の北海道から三重県鈴鹿市の第一気象連隊に入隊。幹部候補生中隊にいました。鈴鹿山麓の崖の地下壕兵舎に立て籠もり、敵の上陸に備え、意気盛んでした。玉音放送の当日、練兵場に整列すると突然、放送の速記役を命じられ、戦友3名と、受信機の置かれた白布のテーブルにつきました。正午の時報がなるや、陛下の玉音放送です。速記用のペンが落着かず・・・、陛下の特殊なテンポのお言葉（玉音）と難解な語句とで、殆ど収録できず、放送は終ってしまいました。うろたえていると、隊長は「戦争は終わった。気にしなくて良い」と記録用紙には目もくれず去って行った。宥められホッとした一瞬、閃いたのは―驚天動地―〈決死の覚悟は？死なずにすむ！―故郷に帰れる！〉、偽らざる気持ちでした。身の回り品を全て焼却する、復員は意外にも早く、3日後の第一次復員群に加わりました。

昭和20（１９４５）年８月18日、整列した我々に、連隊長の訓示があった。「諸君は良くやってくれた。みな故郷に帰れるぞ！何よりも戦災で肉親を亡くした諸君には気の毒でならぬ！みな夫々の境遇に戻るが、辛い事ばかりだ！こらえ、こらえ、玉音を胸に、子孫の為に頑張ろう」と、別れの「檄」をとばした。大混乱の復員列車は、鉄路の破壊が少なくて幸いであった。無事にわが家へ！。思うに、あの廃墟、絶望を乗り越え、よくぞ今日の、豊かな世を築き上げたものである！「世界の七不思議」と言われる程の復興振り！粘り強く立ち上がった日本人は、本当に「逞しくて、賢い」「すごい民族」なのです。我ら、先輩に感謝。この誇りを忘れてはならぬ！

本題に戻る事に。終戦の玉音放送から70年過ぎた**２０１５年８月15日、戦後70年**に当たり、宮内庁は、昭和天皇がラジオを通じ国民に向かって、終戦を伝えた「玉音放送」などの録音原盤と音声を、初めて公開した。これまで出回っている音声より鮮明で、重大な発表に臨む昭和天皇の息遣いも感じられるという。同庁は昭和天皇が終戦の「聖断」を下した皇居内の地下施設・御文庫（おぶんこ）付属室の写真や映像も公表し、何れも同庁ホームページに掲載するとのこと。初公開されたのは「堪へ難キヲ堪へ、忍ヒ難キヲ忍ヒ」という内容で知られ、１９４５年８月15日にラジオ放送された玉音放送のレコード原盤５枚と、翌昭和21年（１５月に放送された「食糧問題の重要性に関する昭和天皇の御言葉」のレコード原盤１枚。６枚は１つのレコード缶に収められ、宮内庁が厳重に管理してきたという。宮内庁は専門家の協力で、玉音盤を丁寧に再生し、約４分30秒の音声をデジタル録音した。音声には経年劣化などによるパチパチという音が含まれる一方、昭和天皇の声がはっきり聞こえ、緊張感のある収録当時の雰囲気が伝わってくるという。当時、両陛下や皇太子さま、秋篠宮さまも音声を聞かれたといいます。玉音盤は終戦前日の１９４５年８月14日深夜、宮内省内廷庁舎（現宮内庁庁舎）で録音されました。御政務室に置かれたマイクの前で昭和天皇が終戦の詔書を読み上げ、隣室で日本放送協会の技術職員が録音機を操作した。録音は２度行われ翌日の放送には２度目の方が使われた。１９４６年７月にはＧＨＱ（連合国軍総司令部）に一時貸し出されており、その後のテレビ放送などに使われてきた。声はこの際に複製された音源を基に複製されたもの。この度、２０１５年に、宮内庁が復元公開した当時の音声（玉音盤）と、原文ならびに現代語訳文は、難しいので、全文にわたり、句読点を挿入し、旧漢字には振り仮名を、亦新漢字に変えるなどして、分かり易くしています。次に**原文を（太文字）**で、現代語訳を（標準字）に直し

一節ずつに分けて、紹介します。

戦争終結の詔書（原文と現代語訳文併記）

朕(ちん)深(ふか)ク世界(せかい)ノ大勢(たいせい)ト帝国(ていこく)ノ現状(げんじょう)トニ鑑(かんが)ミ非常(ひじょう)ノ措置(そち)ヲ以(もっ)テ時局(じきょく)ヲ収拾(しゅうしゅう)セムト欲(ほっ)シ茲(ここ)ニ忠良(ちゅうりょう)ナル爾(なんじ)臣民(しんみん)ニ告(つ)ク

私は、世界の情勢と日本の現状を深く考え、非常手段によってこの事態を収拾しようと思い、忠実なるあなたたち臣民に告げる。

朕(ちん)ハ帝国(ていこく)政府(せいふ)ヲシテ米英支蘇(べいえいしそ)四国(しこく)ニ対(たい)シ其(そ)ノ共同宣言(きょうどうせんげん)ヲ受諾(じゅだく)スル旨(むね)通告(つうこく)セシメタリ

私は帝国政府に、「アメリカ、イギリス、中国、ソ連の四カ国に対して、共同宣言（ポツダム宣言）を受け入れると伝えるように」と指示した。

抑々(そもそも)帝国(ていこく)臣民(しんみん)ノ康寧(こうねい)ヲ図(はか)リ万邦共栄(ばんぽうきょうえい)ノ楽(らく)ヲ偕(とも)ニスルハ皇祖(こうそ)皇宗(こうそう)ノ遺範(いはん)ニシテ朕(ちん)ノ拳々(けんけん)措(お)カサル所(ところ)曩(さき)ニ米英(べいえい)二国(にこく)ニ宣戦(せんせん)セル所以(ゆえん)モ亦(また)実(じつ)ニ帝国(ていこく)ノ自存(じそん)ト東亜(とうあ)ノ安定(あんてい)ヲ庶幾(しょいく)スルニ出(いで)テ他国(たこく)ノ主権(しゅけん)ヲ排(はい)シ領土(りょうど)ヲ侵(おか)スカ如(ごと)キハ固(もと)ヨリ朕(ちん)カ志(こころざし)ニアラス然(しか)ルニ交戦(こうせん)已(すで)ニ四歳(しさい)ヲ閲(けみ)シ朕(ちん)カ陸海(りくかい)将兵(しょうへい)ノ勇戦(ゆうせん)朕(ちん)カ百僚(ひゃくりょう)有司(ゆうじ)ノ励精(れいせい)朕(ちん)カ一億(いちおく)衆庶(しゅうしょ)ノ奉公(ほうこう)各々(おのおの)最善(さいぜん)ヲ尽(つく)セルニ拘(かかわ)ラス戦局(せんきょく)必(かなら)スシモ好転セス世界ノ大勢(たいぜい)亦(また)我ニ利(り)アラス加之(しかのみならず)敵ハ新(あらた)ニ残虐(ざんぎゃく)ナル爆弾ヲ使用シテ頻(しきり)ニ無辜(むこ)を殺傷(さっしょう)シ惨害(さんがい)ノ及(およ)フ所(ところ)真

(しん)ニ測(はか)ルヘカラサルニ至(いた)ル而(しか)モ尚(なお)交戦ヲ継続(けいぞく)セムカ終(つい)ニ我(わ)カ民族(みんぞく)ノ滅亡(めつぼう)ヲ招来(しょうらい)スルノミナラス延(ひい)テ人類ノ文明(ぶんめい)ヲモ破却(はきゃく)スヘシ斯(かく)ノ如(ごと)クムハ朕(ちん)何(なに)ヲ以(もっ)テカ億兆(おくちょう)ノ赤子(せきし)ヲ保(ほ)シ皇祖(こうそ)皇宗(こうそう)ノ神霊(しんれい)ニ謝(しゃ)セムヤ是(これ)レ朕(ちん)カ帝国政府(ていこくせいふ)ヲシテ共同(きょうどう)宣言(せんげん)ニ応(おう)セシムルニ至(いた)レル所以(ゆえん)ナリ

そもそも、帝国臣民が平穏無事に暮らし、世界が共に栄えて喜びを共有することは、歴代天皇が昔からのこしてきた教えであり、私もおろそかにしなかったものである。アメリカとイギリスに宣戦布告した理由も、帝国の自立と東アジアの安定を望んだからである。他国の主権を排除して、領土を侵略するようなことは、もとより私の意志ではない。戦争はすでに四年も続き私の陸海軍の将兵は勇敢に戦い、私の多くの役人たちも精一杯、職務にはげみ、私の一億人の臣民も身をささげて、それぞれ最善を尽くしたが、戦局は必ずしも好転せず、世界情勢も我々に不利である。それだけでなく、敵は新たに残虐な爆弾を使用して、罪のない人々を殺傷し、その被害が及ぶ範囲は測り知れない。尚も戦争を続ければ、我が民族の滅亡を招くばかりか、人類の文明をも破壊してしまうだろう。そんなことになったら、私はどうやって何億もの我が子のような臣民を守り、歴代天皇の霊に謝罪できるだろうか。これが、私が共同宣言に応じるよう政府に指示した理由である。

朕(ちん)ハ帝国ト共(とも)ニ終始(しゅうし)東亜(とうあ)ノ解放(かいほう)ニ協力セル諸盟邦(しょめいほう)ニ対シ遺憾(いかん)ノ意(い)ヲ表(ひょう)セサルヲ得(え)ス帝国臣民ニシテ戦陣(せんじん)ニ死(し)シ職域(しょくいき)ニ殉(じゅん)シ非命(ひめい)ニ斃(たお)レタル者及(および)其(そ)ノ遺族ニ想(おもい)ヲ致セハ五内(ごだい)為(ため)ニ裂(さ)ク且(かつ)戦傷(せんしょう)ヲ負ヒ災(さい)禍(か)ヲ蒙(こうむ)リ家業ヲ失(うしな)ヒタル者(もの)ノ厚生(こうせい)ニ至(いた)リテハ朕(ちん)ノ深(ふか)ク軫念(しんねん)スル所(ところ)ナリ惟(おも)フニ今後帝国ノ受(う)クヘキ苦難ハ固(もと)ヨリ尋常(じんじょう)ニアラス爾(なんじ)臣民(しんみん)ノ衷情(ちゅうじょう)モ朕

(ちん)善(よ)ク之(これ)ヲ知(し)ル然(しか)レトモ朕(ちん)ハ時運(じうん)ノ趨(おもむ)ク所(ところ)堪(たえ)ヘ難(がた)キヲ堪(たえ)ヘ忍(しのび)ヒ難(がた)キヲ忍(しのび)ヒ以(もっ)テ万世(ばんせい)ノ為(ため)ニ太平(たいへい)ヲ開(ひら)カムト欲(ほっ)ス

私は、東アジアの解放のため日本に協力した友好諸国に対し、遺憾の意を表明せざるをえない。帝国臣民の中で、戦死したり、職場で殉職したり、悲運にも命を落としたりした者、その遺族のことを考えると、悲しみで身も心も引き裂かれる思いだ。また、戦争で傷を負い、戦禍を被り、家や仕事を失った者の生活も、とても心を痛めている。これから日本帝国が受ける苦難は尋常なものではないだろう。臣民みなの気持ちも、私はよくわかっている。けれども私は、時の運が向かってしまったところに従い、耐えられないことにも耐え、我慢できないことも我慢して、それによって子孫のために太平の世を開いていきたいと思うところである。

朕(ちん)ハ茲(ここ)ニ国体ヲ護(ご)持(じ)シ得(え)テ忠良ナル爾(なんじ)臣民(しんみん)ノ赤誠(せきせい)ニ信倚(しんい)シ常ニ爾(なんじ)臣民(しんみん)ト共(とも)ニ在(あ)リ若(も)シ夫(そ)レ情(じょう)ノ激(げき)スル所(ところ)濫(みだり)ニ事端(じたん)ヲ滋(しげ)クシ或(あるい)ハ同胞排擠(はいせい)互(たがい)ニ時局ヲ乱(みだ)リ為(ため)ニ大道(だいどう)ヲ誤リ信義(しんぎ)ヲ世界ニ失(うしな)フカ如(ごと)キハ朕(ちん)最(もっと)モ之(これ)ヲ戒(いまし)ム宜(よろ)シク挙国(きょこく)一家子孫(しそん)相伝(あいつた)ヘ確(かた)ク神州(しんしゅう)ノ不滅(ふめつ)ヲ信(しん)シ任(にん)重(おも)クシテ道遠(みちとお)キヲ念(おも)ヒ総力(そうりょく)ヲ将来(しょうらい)ノ建設(けんせつ)ニ傾(かたむ)ケ道義(どうぎ)ヲ篤(あつ)クシ志(し)操(そう)ヲ鞏(かた)クシ誓(ちかつ)テ国体(こくたい)ノ精華(せいか)ヲ発揚(はつよう)シ世界(せかい)ノ進運(しんうん)ニ後(おく)レサラムコトヲ期(き)スヘシ爾(なんじ)臣民(しんみん)其(そ)レ克(よ)ク朕(ちん)カ意(い)ヲ体(たい)セヨ

私はここに国体を護ることができ、忠実なあなた方臣民の真心を信じ、常にあなた方臣民とともにある。もし、感情のままに事件を起こしたり、同胞が互いに陥れたり、社会情勢を混乱させたりして、道を誤り、世界の信用を失うようなことになれば、それは私が最も戒めたいことである。国を挙げて一家のよ

うに団結し、子孫に受け継ぎ、神国日本の不滅を信じ、担うべき責任は重く、道のりは遠い。これらを思い、総力を将来の建設に傾け、道義を大切にし、志を固く守ること。国体の精華（※天皇を中心とした日本の国家の優秀さ）を掲げ、世界の進歩・発展から遅れないよう心がけなければならない。あなた方臣民は、之が私の意志だとよく理解して行動せよ。

御　名　御　璽

昭和二十年八月十四日

内閣総理大臣鈴木貫太郎

――――　玉音放送の要約　――――

「終戦の詔書」の現代語訳を要約し、昭和天皇の伝えようとしている意味を更に分かりやすく解説します。昭和天皇は、冒頭で米英に対し宣戦布告したのはアジア諸国を侵略し領土を広げようとしたからではなく、西欧諸国から、常に、植民地化の脅威にさらされているアジア諸国を解放し、力を合わせて発展しようとしたからである、と開戦の理由を説明しています。しかし戦闘状態が4年と長い歳月に及び多くの犠牲が出ているにもかかわらず、戦況は悪化するばかりである。さらに追い打ちをかけるように原子爆弾という恐ろしい兵器が投入された。この兵器がさらに使われるようなことになれば日本が消滅するだけでなく、人類の滅亡を招くであろう。そのような悲劇を阻止すべく、ポツダム宣言を受け入れる決意をした、と戦況の悪化と被害の拡大に心を痛め日本だけでなく人類の行く末を憂いたことが決断の背景であると述べています。

そして、戦死した者や、その家族、空襲で生活の基盤を失った人々の悲しみや苦難に心を痛めていることに触れ、敗戦を受け入れる決断の辛さを吐露しておられます。しかし、それでも、未来の日本国、日本国民の平和のために、今はつらく悔しくとも「堪え難きを耐え忍び難きを忍び」敗戦を受け入れ終戦しようと強い意志を表明されました。まるで、この玉音放送録音後に起こったクーデター未遂事件（宮城事件）を予見するかのように、敗戦という事実を受け入れられず、さらに争いを起こすような暴挙は起こしてはならないと強く戒めておられます。その上で日本国民が力を合わせ将来の日本に平和と発展を齎そうと鼓舞激励を全国民に向けて発信されたのです。

昭和天皇の肉声がレコード（玉音盤）に収録されたのは、前にも述べたが、放送の前日（8月14日）に昭和天皇がポツダム宣言受諾の意思表明、（いわゆる「ご

聖断」）をした「御前会議」から数時間後の事です。翌15日正午、日本放送協会（ＮＨＫ）のラジオで放送され、国民は降伏の事実を知らされた。放送を阻止しようと軍部のクーデターが起きたが鎮圧された（宮城事件・後述）。

「玉音放送」が流れた8月15日が、現在では「終戦記念日」とされています。しかしその時、問題になったのはどうやって国民に降伏したことを知らせるかでした。当時の、情報局総裁・下村宏氏の発案で、ラジオ放送で、天皇が直接呼びかけることになりました。それまで、天皇がラジオに出演するなどということはありませんでした。そのため、殆どの国民は天皇の声を聴いたことがなかったのです。異例のラジオでのメッセージという形でしか、敗戦の事実を国民に伝える方法がなかったことを物語っています。

玉音放送「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」の本当の意味とは？

――ホームページより――

終戦の詔書の玉音放送の中で、戦後そのフレーズの音声だけが独り歩きしている感のある「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」の本当の意味は、矢張り全文の現代語訳を知らなくては理解が進まないでしょう。原文や全文の現代語訳を学んだ今、昭和天皇が玉音放送に込めた意味は、国民を労う言葉ではないということが分ります。玉音放送の全文を知らず、「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」戦後の困難を乗り越えてほしい、と天皇が国民を労い説得しているのだと考えている人が多いのではないでしょうか。しかし、終戦の詔書の玉音放送の原文全文、そして現代語訳を知った人は、「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」の**主語が国民ではなく、**昭和天皇ご自身であることが分かる筈です。昭和天皇自らが「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」平和への道を切り開いていくと強い志を表明しているのです。

終戦の詔書の全文を通して昭和天皇が一番強く切実に願っていることは何か、

それは将来の日本国、日本国民の平和と発展です。戦地で非業の死を迎えた人や空襲で倒れた人、その遺族の悲しみや苦しみを胸に、敗戦国の元首として受けるであろう非難や苦難を「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」抜き、平和を確立しようという強いお気持ちを「終戦の詔書」に込めた。だからこそ玉音放送を聞いた人々は昭和天皇の悲壮な決意に胸を打たれ泣き崩れたのでしょう。戦後日本は驚異の発展を遂げ、現代

人の私たちは過去の戦争の惨事を忘れがちです。現在私たちが享受している平和や便利な生活、安全な社会は全て戦争を経験した人々が、昭和天皇と共に「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」努力の上に確立したものなのです。新たな時代を迎えた今、私たちは改めて「堪え難きを堪え忍び難きを忍び」の意味を考えるべきではないでしょうか。昭和天皇の玉音放送の本当の意味は日本とアジアの共存共栄を願って戦ってきたが、原爆のような兵器を使いやがった。しょうがない、一時ポツダム宣言を受けいれ「戦闘を終了する」と、言っているだけかもしれません？

――ツイッター＆談話より――

一、玉音放送を聞いた当時の日本人で、「あぁーやっぱり 負けたんだって」と、思った人は、少なかったのではないでしょうか？祖母の話では、近所のお寺で近所の人たちが集まって、放送を拝謁したそうですが始まる前から、本土決戦か、終戦になるかで、既に話し合われていたそうなのです。ドラマとかで見る玉音放送を聞くシーンでは、なんか、終戦が突然だったと言う描写が多く、祖母の話は記憶違いではなかったのかと、最近不思議に思います。玉音放送を聞いたものの、蝉の声で全く聞こえず、役所で終戦を聞き、あぁ、負けたんだ、とやっと思えたと言っていました。

心にぽっかりと穴が空いたようになり、その日は本土決戦の為に作っていた竹槍を全て、燃やしたと言っていました。一緒に聞いた人達も、軍人関係の人がいる訳でもなく、お坊さんと、祖母を含む近所の女、子供、年寄りと、疎開してきた子供達だけだったそうです。連日の空襲が酷く、終戦を予想していた人は、流石に日本狭しと、言えども、居ましたよね？・・

二、他界した祖父に聞いた話しですが、玉音放送の意味を理解出来ていた人は居なかったと聞いています。女子供が、タケヤリの突きかたの練習をしていた時に、突然の玉音放送だったそうです。

三、天皇の朗読に、独特の節回し（天皇が自ら執り行う宮中祭祀の祝詞の節回しに起因するという）があり、また詔書の中に難解な漢語が相当数含まれていたために、「論旨はよくわからなかった」という人々の証言が多かったようです。直後のアナウンサーによる終戦詔書の奉読（朗読）や玉音放送を聴く周囲の人々の雰囲気、玉音放送の後の解説等で事情を把握した人が大半でした。また、ほとんどの国民にと

って天皇の肉声を聴くのはこれが初めての機会であったため、天皇の声の異様さ（朗読の節、声の高さ等）に驚いたというのも、しばしば語られることである。また、沖縄で玉音を聞いたアメリカ兵が日本人捕虜に「これは本当に天皇の声か？」と尋ねたが、答えられる者は、いなかったというエピソードがある。「わからないことより、天皇の声を初めて聞いたことにまず戸惑った」と、

四、「玉音放送と同時に停戦命令が全軍に通達されているから、小学校などにも配属将校がいたし、在軍人会も通じて情報が拡散されていた」。「事前に情報が漏れ」、降伏するとの噂もあった。

五、声ではあまり理解出来なくとも、翌日新聞に全文載ったんだから、多くの人は理解出来ただろ。文字になれば現代人でも何とか分かる。「戦争をしたらダメって思った」。「当時の庶民たちの［常識］の中にどれだけ歴史や漢文の要素があるのか、少しは勉強してから書き込めよ」。「あと、玉音放送が理解されなかったのは、〈ラジオが雑音だらけで、何を話しているのか判らなかった〉という証言は多数あるけれども、内容が［超遠回し］だからという理由は、見聞したことがない。「玉音放送を理解できなかった理由が、文章が［超遠回し］かつ「一般的に使用されていない言葉が多過ぎる」というなら、まずはお前のソースを示せよ」。「お前、今の知識で勝手に解釈してるだけだろ？」「当時の庶民たちの［常識］の中にどれだけ歴史や漢文の要素があるのか。チャット反論。

六、宮城事件―田中陸軍大将による解決―放送

最高機密を知る立場にいた軍人たちは激昂したが、降伏自体に激昂した訳ではありません。その理由は「無条件降伏」によって『国体（天皇制）保障されない』事であり、「せめて連合軍に天皇制の存続だけは確認すべきだ」。という反対意見が最高戦争指導会議でも通らず、早い受諾が進められたことで、陸軍の徹底交戦派は、クーデターを決断しました。ともあれ、陸軍参謀本部の一部強硬派とそれに賛同する軍人によって近衛師団を動かし、宮城を占拠するという、とんでもない計画が動きだしたのです。彼らは、阿南陸軍大臣や梅津参謀総長に賛同を求めたものの拒否され、近衛師団だけではなく、上部組織の東部軍管区（第12方面軍）をも動かそうと田中司令官に面会を求めたものの、計画を知っていた田中に一括されて叩き出されます。《馬鹿もん、貴様

らの言わんとする事はわかっとる！帰れ！》と。アメリカを知る田中にとって抵抗継続は損害を増やすのみで無意味と理解しており、昭和天皇が終わらせることを決めた以上は従うのが当然でした。ただし、田中の一喝が、悪い方に覚悟を決めさせてしまったのか、それとも正気を失ってしまったのか叩き出された若きエリート将校の畑中少佐はその後に他の将校が説得中だった近衛第一師団長、森中将を殺害してしまいます。そして、宮城事件が勃発します。田中の素早い命令『宮城事件を鎮圧せよ』。数時間で鎮圧と言うより解決されたのです。朝６時にはクーデターを知った昭和天皇が「兵士の前に出て話そう」と、自ら説得しようとしていましたが、そうするまでもなく、田中の手によりクーデターは終わっていたと言う早業でした。その後も無条件降伏に納得せず、戦い続けようとする部隊の、散発的な「決起」が幾つか起こっており、田中はそのたび「火消し」に走ります。戦後日本のスタートに大きな役割を果たしたのが、東部軍管区司令官の陸軍大将、田中静壱でした。８月24日夜、司令室で、拳銃で心臓を打ち抜いて自決、世を去りました。宮城を守りきれなかった責任？…。

14日夜、玉音収録の作業が終わり、宮内庁から出たところで、下村宏や放送協会（ＮＨＫ）の録音班は近衛歩兵第二連隊第三大隊長畑中少佐らにより、身柄を拘束されてしまいます。軍の中には降伏に反対する勢力がいて、放送を止めるために実力行使に出たわけです。また、皇居や放送協会の占拠の計画もあって、大規模なクーデターになりかねない状況でした。しかし、幸いにも早朝には鎮圧（と言うより）解決されて、クーデターは失敗に終わります。玉音放送」は予定通りに放送されることになり、**８月15日の正午**、「玉音放送」が日本全国のラジオで流れました。当時、ラジオ局は日本放送協会（ＮＨＫ）しかありませんでしたので、ほとんどの国民が同じ放送を聞いたことになります。

しかし、「玉音放送」は難しい漢文訓読体で、天皇の朗読が独特のテンポだったこともあり、多くの国民は内容を理解できなかったようです。その後、アナウンサーによる解説が流れ、午後に配達された新聞でも詳細な内容が書かれていて、そこでやっと日本の敗戦を知ったという人も多かったようです。

――あとがき――

☆75年前にタイムスリップみな終戦玉音に哭く。

「昭和からの伝言シリーズ」も№4になります。テーマの「玉音放送」で『天皇陛下の肉声』・初めて聞く鶴の一声・が国民に与えたインパクトが如何に強いものであったか、もし、宮城事件が鎮圧されずに、玉音盤が阻止されていたとしたら、終戦が、あれほど速やかに、然も平穏に、全国民に理解されていったでしょうか？更に国内での非常事態などの混乱を想像すると身の毛がよだつ思いがします！この際、気に入ったチャットや、談話を挿入しました。戦争を知らない人達も、これ等から終戦当時を知って頂けるのではなど、また、未曾有の国難を胸に刻んで欲しい一念で書き進めました。微意をお察し下さい。次号はテレビ、ドラマ「玉音放送を作った男たち」の採録版を予定しております。戦時を思せるような、怖いコロナウイルス！収束は何時か分りません？医療の現場のスタッフの方がたは、命がけの毎日です！。本当にご苦労さま！頭が下がります。

―２０２０(令和２)年５月・回想記・９５才―